

## 文化コンセプトとレアリア —— 外国語教育における言語文化の役割 ——

サヴィノワ, アリーナ

皆さん！今日は！アストラハン国立大学の東洋言語学科のアリーナ・サヴィノワと申します。

今日は外国語教育におけるレアリアとその言語文化との相関関係について発表したいと思います。

ロシアではレアリアに対して科学的な関心が生じたのは、20世紀の70年代からのことです。20世紀前半に言葉を完全な言語学の現象だけでなく、言語と文化の繋がりを中心に分析が行われた研究に基づいて、レアリアは言語的な研究対象として、さまざまな学問領域では検討されました。その中で、初めてレアリアの体系的な記述を提供したのは、言語から国のことを知る言語教育を行う分野である言語的日本事情（лингвострановедение – раздел лингводидактики）の創始者でした。言語外的な原則に基づいて、レアリアの複数のタイプが同定されようになりました。それは、経済と政治レアリア、地名と人名レアリア、文学・伝承・文化・芸術レアリア、料理・飲み物・服・家具などのいわゆる日常生活レアリアなどです。

レアリアは各国文化が最も豊かに反映している背景を持つ上に、その国の言葉の母語者がみんな知っている歴史や文化に関する追加情報や連想も含まれています。辞典の定義によると、レアリアとは、ある民族の歴史・文化・生活・様式（уклад）の他の民族にはない特徴としての物・概念・現象とともに、それらの意味を表している言葉とその言葉を含めている表現（慣用句・ことわざなど）とされます。つまりロシアの言語学においては、ある特徴を持っている言語外の面も、それを名指しする言葉もレアリアとして扱われています。そしてレアリアに属しているある概念は別の単語（маевка, субботник, щи など）、単語の組み合わせ（Мамаев курган, дом отдыха）、文（не все коту масленица）と略語（гороно, КГБ, ГАИ）によって表現されます。こういったレアリアが、外国語教育においては「背景知識」（фоновые знания）のもとを構成しています。それでコミュニケーションをうまく成立させるために、背景知識が一致しなければなりません。ロシアの外国語教育のスタンダードによると背景知識は国の文化の現象と事情についての知識（レアリア）とその国における適切な行動基準（礼儀）からなっています。つまり外国語を教えるのはともかく、国の社会と文化の特徴についての知識も構築させなければなりません。原則として新しい言葉を教える際には、殆どの場合学生たちはその知識が全くありません。そして既に持っている経験だけに基づいて捉えると、外国の文化について大きな過ちや歪みが生じること

になりかねません。したがって外国語教育においては、背景知識とそれを構成するレアリアと行動基準には重点をおかなければならないのです。

それでは、このような観点で、ロシアの大学でよく使用されている日本語教科書について分析してみたいと思います。基礎を導入する際には、たいていロシアの書籍—Л.Т. Нечаеваの「Японский для начинающих」とЕ.В. Стругова, Н.С. Шефтелевичの「Читаем, пишем, говорим по-японски. Базовый учебник」という教科書を元に学習が行われています。レアリア言葉は大体各課にあります。テーマ別に構成されているわけでもなく、結構ランダムな順序で紹介されています。例えば、第11課で導入した「日本の家」のテーマに属している「障子」というレアリアはなぜか初めて第27課に出てきます。レアリアの大部分は表現語彙（発表用語彙 активный вокабуляр）の一部として練習されますが、理解語彙（認知用語彙 пассивный вокабуляр）の中に入れられたとても大事な日本のレアリアもあります。その教科書のレアリアの中で一番多いのは地名レアリアです。料理・飲み物・服・行事・家具などのレアリアも入っていますが、その数は少ないし、ちゃんとした説明もありません。地名レアリアも他のレアリアの紹介方法としてはほとんどの場合にはロシア語の翻訳・簡単な説明が使用されているが、おかしいところも多くあります。例えばゴールデンウィークは“святая неделя”「神聖の週」とか、寿司・おにぎり・さしみなどはただのяпонское национальное блюдо（日本の料理）として説明されています。時々ある事情について文化上のコメントが入っています。例えば日本の家のことを教える時に「たたみ」「応接間」「おふろ」「茶の間」「おしきれ」「日本間」を簡単に説明するロシア語のテキストが載せてあります。文法を練習する際にもなるべく日本事情・レアリアに基づいて身につけさせる問題も少なくありません。例えば、「何々の次です」とか、「て形」とか「序数」などを練習させるには東京の山手線とその駅を使います。

紹介されるレアリアの言葉を簡単にテーマ別にまとめると、「四季」「祭り」「料理」「地理」「名所」「家」に限られています。そのテーマを中心に絵を描写することとか、日本事情についてスピーチするという問題も教科書には数多くあります。そして中級レベルで、Нечаеваの中級の日本語教科書では日本の事情とレアリアは特に強調されています。その教科書のテーマの一覧を見てみると、「日本語の特徴」「日本文学」「日本歴史」「神道」「日本の漫画」「日本の庭の美」「和風旅館の魅力」「都市デザイン」「おしゃべりな色と寡黙な色」「国連と日本」「踊りと舞い」「歌舞伎・能」「日本人が魚好きになったわけ」「日本人の結婚観」「大相撲の世界」「都会の中の森」などのテーマはレアリアとともに日本文化の様々な側面を導入しています。それでレアリアの数も二倍ほど多くなります。

要するに、ロシアで一般に教材とする日本語の教材には背景知識のもとになるレアリアは、ランダムでも、テキスト・スクリプトに広く盛り込まれているほか、日本語能力が上達するにつれて、日本事情やレアリアがさらに高く注目されているのです。

しかしこういったロシアの日本語教材のテキストは「四季」「風鈴」「お風呂」などのレアリアのただの記述です。言い換えれば、テキストの中で導入されるレアリアは日本に来たばかりの留学生が日本人の先生に教えてもらう形で述べられています。例えば次のようになっています。十二月になったが、外はあまり寒くありません。部屋の中の方が寒いのです。アンナとセルゲイは大変寒い冬しか知らなかったから、驚きました。二人は山田先生に日本のことをいろいろ説明してもらいます。「日本には春、夏、秋、冬の四つの季節があります。日本人は四季の移り変わりを楽しみます。…」。会話のスク립トも、いつもだいたい同じパターンになっています。

レアリアを記述的に説明しながら背景知識を構築するロシアの教材に対して、日本の教材を簡単に分析してみたら、背景知識より、ある状況での礼儀とマナーに重点が置かれています。『みんなの日本語』の初級の会話テーマを見ると、「初めまして」「ほんの気持ちです」「一緒に行きませんか」「ごめんください」「そろそろ失礼します」「残念です」「色々お世話になりました」などの会話が徹底的に導入されます。レアリアの記述的な説明は中上級のレベル向けの教材に盛り込まれています。例としては、『マンガで学ぶ日本語表現と日本文化』と『日本人の心がわかる日本語』で、これらの教材は4・5年生に教えるときによく用います。前者は普通に教科書に出てこない語や表現、日本人の考え方や季節感を漫画の形で楽しく紹介される教材で、後者は外国の人たちから見ると、なかなか理解しにくい事柄「人目」とか「控えめ」「けじめ」「内と外」などのことを中心に、日本人はどのように思ってこう言うのか、またこう言ったときはどのように感じているのか、について分かりやすく書いたものです。

日本語の学習に関する科目は低学年（1・2年生の時）「実習日本語」、高学年（3年次以降）「日本語コミュニケーション実習」を履修しますが、それに加えて、言語から日本のことを知るという科目、先に述べた言語的日事情、ロシア語で лингвострановедение が必修科目であります。Лингвострановедение は一般に日本の地理・歴史・宗教・文化と習慣・文学・社会・政治のレアリアを中心にロシア語で講演する理論的なコース(теоретический курс)ですが、履修時期は5年の第2学期に行われています。かつてはその科目は2年生の時履修するものでしたが、すでに学んでいる国の事情を知っているはずの学生になぜそのコースを卒業直前に導入する必要があるのか、今でも皆不思議に思っています。ですから、実はその科目の時間を日本語の実習に用いることは少なくありません。

しかし学生達は、教育の5年の間にレアリアを教えられても、どれぐらい覚えるのでしょうか。覚えるとは、見聞きした事柄を心にとどめることを意味しているでしょう。ただ記憶に物事を意味している単語が残るのところがいます。

事のついでに言えば、その日本語の「覚える」という単語の意味には認識論の質問、すなわち「人はどのようにして物事を正しく知ることができるのか」への答えが含まれています。そして、レアリアは外国人の心にとどめるためにどうすれば良いのか。どんなレア

リアであっても、社会、歴史、伝説、一言で言えば、さまざまな分野の事件と関連して教えるとともに、出来るだけその関係の雰囲気や伝えようとする。つまりリアリアを実感させて、その本質を理解させるのはとても大事だと思います。

具体例としては、私は先生から次の話を聞きました。ある日、食器の特別売り出しの時、非常に気に入った皿を買ったことがあるそうです。あんまり大きくない、長円形の青空色の皿で、斜めに細く曲がっている赤い線が描かれていたそうです。先生は自分がこれほど気に入った皿が日本人の趣味に合うかあわないか、聞き出そうと思って、この皿を日本人の友達に見せました。すると、友だちは「いいものね。本当に、本当に夏の食器だわ」と言ったそうです。その言葉を聞いた時、先生は「お茶の道具だけでなく、家庭の日用品までも季節に合わせているのだな」と思ったそうですが、この皿のどこか夏らしいのかは、その時には理解できなかったということです。それが分かるようになったのは、夏のあるあつい昼でした。アパートの部屋に入った時に、バルコニーの軒に掛けられた風鈴の細長い短冊が、そとの青空を背景にして風にひらひら翻っていました。その光景は、あの青い皿の曲がっている赤い線を思い出させ、そして昔見た大空に舞っている凧のひらひら翻っている紙のしっぽも思い出したというのです。

雲のない青空、涼しさを感じさせる風にひらひら翻っているものは暑い夏のイメージであるということ、先生はそのとき心から実感したのだそうです。先生からそのエピソードについて聞いたとき、自分もたしかに同じような出来事を何回も経験したことを思い出して、日本人の美意識の特徴として挙げられる「連想性」と「象徴性」が、日常生活の面でも発揮されていることを深く感じました。

その角度から文化のリアリアは、生活様式を説明するために用いられる実物であり、その実物の中に、1) 世界観と価値観と強い関係がある実物と、ならびに2) 日常生活の条件等に準用されたものがある。または3) 日常生活の条件等に準用されたものとして生まれ、価値観にも当てはまるものになってしまったのでもある。

その例として挙げられるのは「お弁当」のリアリアです。お弁当は日本人の価値観にも当てはまるものになってしまったので、今日、お弁当は日本の食文化の豊かさだけでなく、日本文化の奥深さも表しています。お弁当を作る時に栄養のバランス、彩りの良さ、ご飯とおかずの割合だけでなく、フタをあける人の喜ぶ顔も考えられているでしょう。

この観点ではリアリアは最近ロシアに積極的に展開している言語学カルチャー（言語文化学）という分野におけるコンセプトに反響があります。簡単に言えば、言語文化学とは、言語と文化の総合関係についての復元的科学知識です。そしてコンセプトとは、現在の言語文化学の主たる範疇の一つです。例としてあげられるのは、「物の哀れ」と「わびさび」で、これらはどこにもない日本だけのコンセプトであります。また、日本人に「わびさび」といえば、すぐ頭の中に連想の脈絡が現れます。その連想は、場面も言葉もイメージも、感覚－聴覚・嗅覚・味覚などのことまで含まれることもあり、その連想は普段に自分の経

験に基づいたものです。したがって、たとえば日本人に「サラリーマン」といえば、人によりそれぞれのイメージと言葉が出てくる。「忙しい」「働き蜂」「制服」「残業」「過労死」など様々な一般的なイメージを表わす連想が挙げられます。ロシア人の場合、この語にはほとんど特別なイメージはありません。なぜかという、ロシアの経済発展は色々な政治の紆余曲折で遅れていたもので、こういったコンセプトは元々なかったのです。ロシアの言語文化には「会社」というコンセプトの重要さはほとんどゼロとなります。要するに、コンセプトとはある出来事についての民族の意識の中だけに存在する融合したアブストラクトのイメージであります。

そういうイメージを学生に教えることと実感させることは、レアリア学習の目的の一つだと思います。もちろん、日本留学を体験していない学生たちには、それは難しいですが、あるレアリアについての連想や象徴を心にとどめる方法がもちろん色々あるでしょう。普通は、学生たちは日本文化や文学に興味を持って日本語学習を始めるので、多くのレアリアのことについて漫画やドラマからすでに知識を持っています。しかし雰囲気や象徴を理解できるのは、日本に留学する間に自分で体験するか、その雰囲気を適切に伝える作品—日本の小説を読んだり、映画を見たりしなければなりません。数ヶ月前二年生たちの日本文化の授業では、茶道の話をしました。学生達は茶道の様子・ながれ・しきたりなどについてしっかりノートを取っていました。一応の様子を伝えた後、短い動画を見せました。ある女子学生がずっと遠い世界にいるように見えたから、「大丈夫ですか。分かりにくいですか」と聞いてみたら、彼女は「いいえ、先生。ただ川端康成の千羽鶴の話思い出しました」と言いました。彼女の記憶に刻んだのは次の言葉です：

「若葉の影が令嬢のうしろの障子にうつって、花やかな振袖の肩や袂に、やわらかい反射があるように思える。髪も光っているようだ。茶室としては無論明る過ぎるのだが、それが令嬢の若さを輝かせた。娘らしい赤い袱紗も、甘い感じではなく、みずみずしい感じだった。令嬢の手が赤い花を咲かせているようだった。」

На сёдзи за спиной девушки падала тень от молодой листвы, и ее яркое нарядное кимоно мягко светилось отраженным светом. От волос тоже исходил этот свет. Пожалуй, для чайной церемонии в комнате было слишком светло, но свет только подчеркивал красоту девушки. Ее фукуса, алая, как пламя, не казалась претенциозной, а, напротив, усиливала впечатление юной весенней свежести. Словно у нее в руках цвел красный цветок.

もちろん、彼女はこれをロシア語で読みましたが、袱紗についての「花を咲かせているようだった」という例えは、彼女の心に深く浸透したようです。彼女はこの経験のおかげで、茶道と袱紗というレアリアのアイデアをある程度より深く理解できたかもしれません。

こういう風にレアリアの雰囲気について、自分なりの経験を重ねながら、レアリアの捉え方とコンセプトとしての本質を把握させたら、留学するときにも、学生たちはレアリアだけでなく、日本人の日常生活に現れている芸術を肌で感じて、考えて、そして日本人に

とっての芸術の役割についてより良く理解できるかもしれません。

以上、簡単ですが日本語教育におけるレアリアの学習とレアリアと言語文化の関係について報告させていただきました。

ご清聴ありがとうございました。